



ねむり姫

澁澤龍彦

ねむり姫

澁澤龍彦



河出書房新社

ねむり姫

昭和五十八年十一月十日 初版印刷
昭和五十八年十一月十五日 初版発行

著 者 澁澤龍彦

発行者 清水 勝

印刷 暁印刷
製本 大口製本

発行所 河出書房新社

〒東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二
電話 〇三―四〇四―二〇二 営業
〇三―四〇四―八六一 編集
振替 東京〇―一〇八〇二
定価は帯・カバーに表示しています

ねむり姫
目次

ねむり姫
7

狐媚記
55

ぼろんじ
89

夢ちがえ

127

画美人

165

きらら姫

203

著者自装

ね
む
り
姫

ね
む
り
姫

オルタンスをさがせ
アルチュール・ランボー

後白河法皇の院政のころ、京に住むなにがしの中納言の娘に、名づけて珠名姫^{たまな}というものがあった。

山から産する石のタマを玉といい、海から産する貝のタマを珠という。玉のような男の子という形容詞があるけれども、かならずしも玉が男性で、珠が女性ときまったものではあるまい。それはともかく、珠名姫はまだ幼いながら、その名が示す通り珠をきざんだような小づくりな美貌の持主で、蒼味をおびるまでに透きとおった、或る種の貝の真珠層を思わせるような皮膚の色をしていた。しかも皮膚の下に、ほんの少しの風でも吹けばたちまち消えてしまいそうな、小さな蠟燭のゆらめく焰があつて、それが内部から貝殻の蒼みをほんのり明るませているといったふぜいである。このいのちの火ともいうべき蠟燭はいつ消えてしまふか分らない。はかなげといえこれほどはかなげな印象はなく、その美しさに目を奪われるよりも早く、ひとびとはつい姫の将来を案じたくなるような、なにがなし憂わしい気分にとらわれがちであつた。

三条坊門のだっぴろい屋敷にあって、珠名姫の幼年時代はかならずしも明るいものではなかった。彼女を生んで一週間もたたぬうちに、倉皇として母が死んでしまったからだ。生みの母を知らず、もっぱら父がやとった乳母あはの手で、姫は育てられねばならなかった。まず、この母について語っておきたい。

姫の母は、瀬戸内海の大三島を本拠として繁栄した古い伊予の豪族、越智氏の血をひいていた。父の中納言が国司として伊予にあるあいだに想いを懸けられ、四年の任期がはてるとともに都に伴われて、いわゆる権の北の方に迎えられたのである。それだけの厚遇にあたいする容色と、気位の高い門閥意識の持主ではあった。ただ、この女、あたかも南国の海辺に芽ばえた植物が北国に移し植えられれば萎れるほかにように、京の土地にいつかな馴染まず、寒いといつてはこれを恨み、暑いといつてはこれを歎いて、みるみるその身を憔悴させた。ふかぶかと雪に埋もれた京の街は、彼女をほとんど恐怖させた。

彼女の眼底に焼きついていたのは、白南風しほはなの吹いてくる丘の上の故郷の屋敷から眺めおろした、こんもりとした榎くすのぎの繁茂であり、船の通いもにぎわしい島の港のたたずまいであった。遣隋使や遣唐使の船も、唐国から渡ってくる船も、一度はここを通らなければならなかったのである。あしまゆく船のいさりのかくるるをきゆと三島にまたや燃ゆらん。かつて島を訪れた藤原佐理が

歌ったように、実際、この海は夜のあいだも船の漁火の絶えることがなかったのである。そういう土地でなら、彼女もいわば植物のように生き生きと活力を取りもどしたかもしれないのだ。

都にあっては見るもの聞くものがおぞましいばかりで、彼女は死ぬ間ぎわには、ひねもす葎もあげずに対屋に逼塞していた。明らかに一種の鬱病であろう。もっとも、珠名姫を生んだ産褥にあって、彼女の出血が一向にとまらなかつたという痛ましい事情もある。一般の意見では、彼女の生命をちぢめたのは、その exilée の傷心によるノイローゼのためということであつたのに、また一方、したりげな説をなすものもあつたのは、こんな産褥における彼女のすがたがひとの口の端にのぼつたからにちがひなかつた。その説によると、じつは彼女は毒を嚙まされて死んだので、下手人はかつて中納言に寵愛されたことのある、さる御息所つきの女房だつたという。むろん、毒は妊娠中の母体とともに、その胎内の子どもの息の根をもとめるはずだつたのだろうが、下手人が毒の調合をあやまつたのか、それとも同じ柩に母子ふたりの屍体をおさめるのはあまりに悲惨だと、運命の神がそれとなく手加減したのか、はからずも母のみが死ぬことになり、珠名姫はからくも生きのびることになつたわけである。

幼児のうちから珠名姫があのように蒼白な皮膚と、将来が案じられるほどはかなげなふぜいを

しているのも、もしかしたら、この母をあやめた毒の後遺症といったようなものだったかもしれない。

ところで、中納言家の家庭内の複雑さを示すものは、この毒の一件ばかりではなかった。母の死後、珠名姫が乳母の手でひっそりと育てられている三条坊門の屋敷のなかに、いつからここに引きとられたのか、もうひとり、男の子がいた。やはり伊予の国から来たらしく、どうやら世間の噂では、これも色ごのみの中納言が国司のころ、同じ土地の別の女に生ませた子どもではないかと疑われた。つまり珠名姫の腹ちがいの兄ということになる。

男の子は珠名姫より三歳年長で、その名をつむじ丸といった。正式には廻毛丸と書くようだが、どうも字づらがうるさいので、ここでは思いきって仮名書きを採用しておくことにする。だれいうとなく、この子には頭につむじが三つあるので、それで父からつむじ丸という奇態な名をつけられたのだ、と取沙汰されるようになっていた。

「おぬし、つむじが三つあるそうじゃな。さてさて、変ったやつもあればあるものよ。見せてみる。」

中納言の落胤という噂があったにもかかわらず、つむじ丸は屋敷内では少しも敬意をはらわれていなかったから、よくこんな調子で家人たちから無遠慮にからかわれた。かぶろにしたその髪

のなかに、ぶしつけに手を突っこむやつさえあった。

つむじ丸は珠名姫とそっくりな蒼白い顔をした少年であったが、見かけによらず性質はしぶとく強情で、うっかり怒らせると箸にも棒にもかからなかった。それが分つたのは、次のようなエピソードがあったからである。すなわち彼は七歳ぐらいのとき、自分よりはるかに膂力すぐれた年上の少年の小指に噛みついて、どうしてもはなさず、ついにこれを食いちぎってしまったのである。やがてだれも、少年の前ではあからさまにつむじの話をしないうになった。

十五歳になると、すでにつむじ丸の放蕩濫行は目にあまるものとなっていた。すっかりさびれた江口あたりの遊女宿に騎馬で通うのなんぞは、だれにも迷惑をかけるものではないからして、まだよいほうである。そのうちには宿場に巣くう傀儡女や辻に立つ白拍子どもをあさっては、京の屋敷内の壺屋にひっぱりこみ、夜を徹して読経あらそいに興じたり、今様を歌ったりして大さわぎをやらかすまでになった。

聶の冠者のきみ

何色の何摺りか好うとう

着まほしき

きじん山吹止め摺りに

はなむらご

みつながしわや

輪鼓りんこ輪ちがえりゅうむすび

「さあ、簪の冠者のきみ、一杯お飲みなされませ。」

「簪とは、だれの簪のことじゃ。珠名姫の簪どのか。これはお似合いじゃ。」

「簪は簪でも、つむじ丸どのは冠者のきみとは申されまいよ。まだ元服前の、髪はかぶろにておわしますゆえ。」

たぶん女出入りからであろうが、つむじ丸は傀儡子の男どもに弱味を握られていて、屋敷のなかまで厚かましく彼らがつきまといつてくるのを如何ともしがたかったようだ。彼が輪鼓を引くことをおぼえたのも、傀儡子との度重なる交際の結果であろう。

輪鼓というのは、中くびれの鼓のかたちをした一種の独樂どがくで、二本の棒のあいだに張った糸の上にこれをのせ、回転させながら空中高く撥ねあげてあそぶものだと思えばよい。輪鼓をまわすことを、輪鼓を引くという。或る日、つむじ丸が中庭でしきりに輪鼓を引いていると、対屋の御